

子ども学探訪

編輯顧問

倉橋惣三

と

キンダーブック

⑥

# 昭和初期の「よいこども」観の変化

浜口順子

(大学教員)

二つの「よいこども」

「よい子供」(第四輯第十二編 一九三三(昭和七)年三月)

「ヨイコドモ」(第十輯第二編 一九三七(昭和十二)年四月)

昭和七(一九三二)年と昭和十二(一九三七)年に、「よいこども」と



▲画像1 「よい子供」(昭和7年)表紙

昭和七(一九三二)年と昭和十二(一九三七)年に、「よいこども」というテーマを共通に持つキンダーブックが作られている(それぞれの表紙は、画像1・画像2)。昭和初期、わずか五年の間隔を経て、同じテーマで取り上げられた二つのキンダーブックを比較すると、その時代の激動ぶりを映し出すように、内容の変化が見受けられる。

キンダーブック創刊(昭和二年)後、十年の



▲画像2 「ヨイコドモ」(昭和12年)表紙

浜口順子(はまぐちじゆんこ)  
お茶の水女子大学大学院教授。

間に発行された一・五編の中で、二回同じテーマが扱われたことは、「よいこども」以外にも、「犬」「お人形」「電気」「水」「動物」「草花」「くだもの」「おもちゃ」「野菜」などがある。どれも当時の子ども達の生活に身近なものだ。子どもたちにとって「犬」は、今よりも身近な存在だったようで、「よいこども」の号の中にも、ちよこんとあたりまえのように犬がいることが多い。

### 子どもの日常の姿から

#### 「あるべき」子どもの姿へ

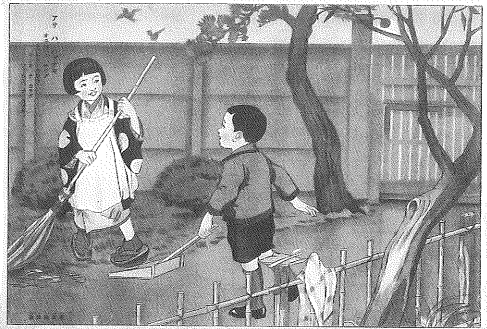
二つの「よいこども」の内容を比較すると(表1)、横長版の昭和七年のものは、縦長版の昭和十二年のものに比べて、全体に、子どもへのまなざしにのどかさを感じる。昭和十年ごろを境に日本全体が戦時体制へと移行するその前夜であることを思わせる。同じ「早起き」を主題とするページを比較してみよう。

昭和7年「よい子供」(横長)	昭和12年「ヨイコドモ」(縦長)
表紙(3人の子どもがジャンケン)(画像1)	表紙(動物をかわいがる)(画像2)
朝は早起き(画像3)	早起き(画像4)
私の譲さん(メルヘン)	ラジオ体操
幼稚園へ(玄関口の様子)(画像5)	お使い(買い物をしてお母さんを手伝う)
元気な子ども(雪だるまを作る)(画像8)	お話(幼稚園で花さか爺さんを聞く)
ご順に願います(駅のプラットフォーム)	お相撲と縄跳び(画像9)
ある日(公園の水道の栓を閉める)	行っていらっしゃい(画像6)
おままごと	子守り(画像7)
交通整理(信号を守り、車に注意)	草取りと水やり
犬の迷子(拾った犬を正直に交番へ届ける)	兄と弟(幼い弟と一緒に遊んでやる兄)
壊れた兵隊(友達への思いやり)	お手伝い
みんなで作ったおうち(幼稚園の大型積み木でおうちを作る)	かわいい大将(徳川家康が幼少時、戦ごっこで弱いほうに味方する逸話)
お誕生日(幼稚園でのお誕生会)	お客様(家への来客を子どもがもてなす)
往来(道で遊ぶのは迷惑。けがのもと)	思いやり(泣く年下の子へ人形を譲る)
よい子ども(画像 最終)	塗り上げ(画像10)
	おててを取って(祖母に手を貸す)
	仲良く遊びましょう(自宅の子ども部屋)

▲表1 昭和7年・昭和12年の「よいこども」編の内容比較



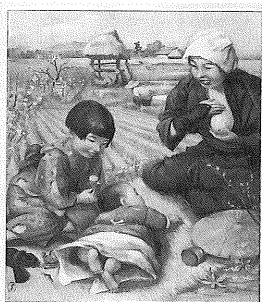
▲画像5「ヨウチエンへ」(昭和7年)



▲画像3「アサハハヤオキ」(昭和7年)

昭和七年のほうは、姉弟が庭掃除をしている図(画像3)で、お手伝いしていることが板に付いた「よいこ」に見える。昭和十二年のほうは、海岸で大きく深呼吸する三人きょうだいの姿(犬もいる！画像4)。朝焼けの空に向かい、両手を開き、胸いっぱい深呼吸する兄、それに従う妹、それをまねするように見上げる小さい弟(そして海を見やる犬)。昭和七年のものに比べると、健康な体をつくり、朝日を仰ぐ、「あるべき」子どもの姿なのだ。

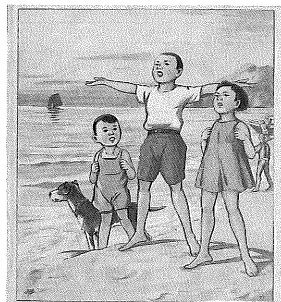
玄関口でお出かけのあいさつをする図も、両方の巻に共通している。昭和七年のものは、ランドセルを背負った(その家の娘を迎えに来たらしい)短におかっぱの女の子が、帽子を手に、優しくほほ笑む母親にあいさつをしている(画像5)。主題は「幼稚園へ」。当時、幼稚園に行くのにランドセルを背負うこともあったのか。一方、昭和十二



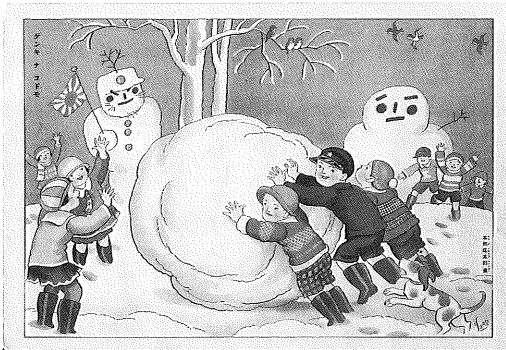
▲画像7「コモリ」(昭和12年)



▲画像6「イッテイラッシャイ」(昭和12年)

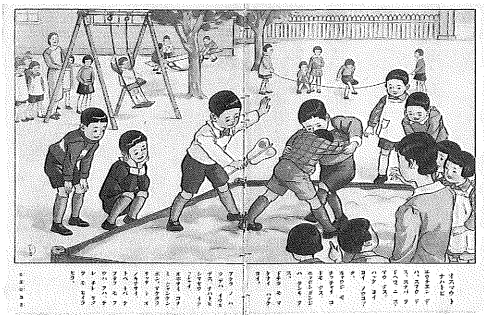


▲画像4「ハヤオキ」(昭和12年)



▲画像8「ゲンキ ナ コドモ」(昭和7年)

庭でままごとをしたりする姿は日常的な光景で、男女が合いまじって(犬も登場)、楽しそうに遊んでいる。それに比べ、昭和十二年版では、園庭で男児たちがお相撲、女児たちは縄跳びをしている(画像9)。男女が別々で、遊びの内容も、強くしなやかな体を鍛えさせようと願う大人の子ども観が感じられる。全体に昭和十二年の巻ではどうしても、「こういう子どもであらねばならない」という大人のまなざしが印象に刻まれる。



▲画像9「オスモウ ト ナワトビ」(見開き2ページ)  
(昭和12年)

年のほうは、出勤する父親と学校に行く男の子を、母親と妹たち、そして女中さんがひざをついて見送る図だ(画像6)。「社会という前線に出かける男性」と「家(銃後)を守る女性たち」という対の構図を暗示しているように見える。また、それに続くページ(画像7)とのコントラストが印象的だ。野良仕事の合間に赤子に乳をやる母親と、その赤子のお守りをする姉らしき女の子。女のあらわな大きな乳房と、背景の農村の風景、しかも梅とタンポポの咲く早春である。自然豊かでプロダクティブな国土の底力を誇らしげに示されているように感じる。

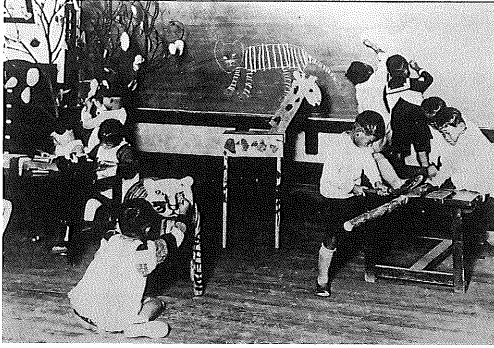
子どもの楽しく遊ぶ姿はどうだろう。昭和七年版にある、雪だるまを作ったり(画像8)、

## 倉橋のこだわり

昭和十二年版のほうで異彩を放ち、見る者に迫ってくるのが、「塗り上げ」という主題のページである(画像10)。女の子が一心にキリンを製作している。「キリンのお首はなあがいね。どこから下ぬりしましょうか。……おめめをかいたらいきってきた。本気でかいたらいきってきた。」という文章が添えられている。



▲画像10「ヌリアケ」  
(昭和12年)



▲画像11

真で、「動物園」を務めていた東京女子高等師範学校附属幼稚園の写がある(画像11、お茶の水女子大学附属幼稚園所蔵)。そこに写っている机や黒板が、「塗り上げ」の絵の中のものとよく似ている。倉橋は著書『幼稚園真諦』(昭和九年)において、「幼児のあるがままの生活」が幼稚園の基盤にあると論じているが、この号は、「あるべき」生活のほうに傾いている。だからこそ、この迫力ある製作風景を入れることに倉橋はこだわったのではないか。

この号の附録『ツバメノオウチ』に、倉橋は自著『幼稚園雑草』(大正十五年)より「本真剣」の章を採録している。「本真剣は我等が子どもに向って望むところであると共に、子どもが自然にそなえている特性の一つである。子どもの心は、一時一事、一時一我

がその特性である。ちよつとでも面白いことがあれば、すぐ他事一切を忘れる。興味の向うところ直ちに全我をその中に没入して、躊躇し遅疑するところがない。これが子どもの本性である。」と言う。

### 倉橋の「良い子ども」論

『ツバメノオウチ』は、キンダーブックの第五輯第一編（昭和七年）から付いた附録冊子の名前だ。版は、ペラペラのA3版の紙を二つ折りにした色刷り版のこともあるし、この『幼児の教育』誌のような小冊子体裁のものもある。編輯顧問はじめ有識者の解説、お話の題材や保育関連情報が載っている。残念ながら、散逸している号も少なくない。

昭和十二年の「ヨイコドモ」編の『ツバメノオウチ』（九—四号）には、倉橋惣三の「良い子ども」の解説が載っているのを左に転載しておく。

#### 「良い子ども」

倉橋惣三

○  
良い子どもとは特別の子どもではない。どこにでもいる子どもである。その意味で、このキンダーブックを見ている子どもは、みんな良い子どもである。

良い子どもというと、何かこう特別な、大人の中でいう聖人とか仙人とか、めったにないもののように思うことは、一般の子どもをよくない子どもときめているのである。これは、何という変な考え方であろう。

考え方として変である位であるから、子どもの方にとって、さらにどの位変な思いをさせられることであろう。

「良い子におなり」

それはよく分っているが、そういう言葉の裏に、お前は良くない子だというような意味がこもっているのが、どうも変であり、どうも気に入らないであろう。

「良くない子達よ。良い子におなり」

これは、なるほど、心もちが悪い。

○

良い子だって、時には良くないこともする。しかし、それですぐ良くない子になる訳ではない。それで

「良い子よ、良くないことをするな」といわれるが、それが親切な注意であると共に

「良い子よ、よいことをせよ」

こそ、最も愉快な忠告である。

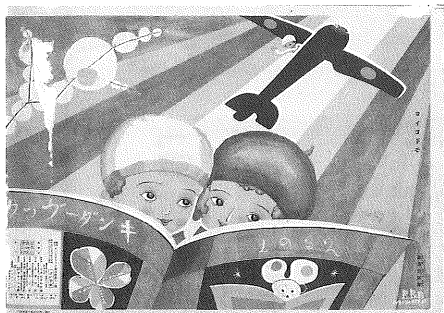
そこで、この巻を見せるにも、どうぞ、そういう心構えでいて頂きたい。

「さあさあ、良くない子達。これを「覽」

という風でなく、

「この中に、良い子がいるでしようか」

なんて、妙にからんだ言い方なんかしないで、「よくあつさりと、何気なく（わざと何気ない顔をするのでなく）さらにねがわくは、そこに集まっている子が、みんな良い子である



▲「ヨイコドモ」(昭和7年)

ここの堅き信念の下に、この絵を見せるんですね。

「あつ、ここに僕がいちあ」

も少々言い過ぎるかも知れないが、ほんとうにそう思う子だって、必ずしも少なくはないはずである。少なくとも

「僕も良い子だ、良いことをしよう」

と思わせるのが、こくこく自然のことである。

この絵の中には、普通の子どものすること以外のことは一つもないはずである。いわんや、普通には出来難いようなことは一つもないはずである。

それは、この巻が修身の教科書でないからである。良い子、どこにでもいる良い子、と  
いうよりも、すべての子どもの良い場面の観察絵本だからである。

だから、これらの絵を見る子ども達は、格別感心したり、世にも稀な  
美談集だぞと思うことはない。それよりも、ただ心もちがよいであろう。  
うれしいであろう。一つ一つの絵の中に、少なくともどれかの絵の中に、  
自分の確かに持っている一面を感じて、愉快にたえないであろう。

おかあさん方も、幼稚園の先生方も、そういう子ども達の心もちを、  
決して邪魔しないようにして下さい。くれぐれも修身絵本でなく、観察  
絵本なのですから。

— 続く — (引用文の旧字・旧かなづかい等は一部書き直してあります。)